

あそ

2

2013



西澄寺(世田谷区)



私は、天井の高みに、花束のように、音楽家たちのつくりだす夢をおこうとした——

マルク・シャガール



**Chagall**  
シャガール  
自画像

あを

二 月



續 函 館

佐藤喜孝

雪蟲かところゑをかくればぬなくなり

群に遅るるいつもの一羽冬の暮

冬霧は深くこそあれ烏賊釣火

草枯の町をしづかに鮭の川

夜鳴烏冬荒波にまぎれつつ

荒海に聲をもらさぬ冬鷗

冬烏賊火寄るとみえしに引明けし

ふるさとと聞くと童謡や向井潤吉の絵の世界を思ひだす。東京のこの地に生まれ老いてきた私にはふるさととは縁遠いものとおもつてゐた。

私が物心ついた所は現住所から五、六分坂を下った桃園川沿いである。戦後そこでは叔母ふたりの三家族と軒を接して暮らしてゐた。家の前の舗装されてゐない路上が遊び場。紙芝居・メンコ・焚火・ベエゴマ・馬跳び・釘刺・缶蹴・日光写真・三角ベース・チャンバラと思いつくまま書いても楽しいことばかりである。ここから遠征する時は虫取かメダカ掬ひ・野外映画・素人演芸会くらいであらう。虫取は近くのお寺。墓守に追はれてひたすら逃げた。桃園川では川浚ひのおじさんが川底にある金目のものを探して歩いてゐたのを別世界のやうに眺めてゐた。

(続)

抽 斗 定梶じよう

信号に塞かれてゐるよ千歳飴

神留守の酒場繁盛さうかさうか

燈を列ね上りの夜汽車雪催ひ

梟の目をまるくせり月に蝕

仕かけしを誰にもいはず兎罫

繩文のかほ弥生のかほ焚火して

抽斗をあけ隙間風あるやうな

かなり昔の話になる。当時出句していた結社誌の主宰は懇切な方で、添削朱正できうる句は添削してとつてくれた。初心、中堅の投句者には随分役に立ったことだった。

今、語彙に係る私のメモ帳を調べてみて、次の添削例があつたことを知った。抽句だが「遅るまじ桜蕊踏み遅刻坂」で、「遅れまじ」と添削してある。平安期、即ち学校文法では「遅るまじ」が正しい。私がメモ帳に遺してある処を按ずると、納得しがたく思ったからに違いない。

年月を経た今考えてみるに、中世、江戸以降「遅れまじ」とするのが普通だった。勿論明治以降昭和に至ってもそうだった。受験文法がゆき渡つてのち「遅るまじ」が正しいと認識されるようになった。

明治生れの主宰者は自分の感性に従つて「遅れまじ」と直した。それはそれで正しい。「誤り」と指摘してはいけないのだ。



須賀敏子

十二月の航空公園相思鳥

冬ざるる駒止の滝あらはなり

冬銀河外湯に沈む葉を拾ふ

大根引くひりりと走るひび深し

煤逃げの人も居るらしジムの混む

極月や投票率の低きこと

歳用意年々省くこと増えし

我家より二分程の所に狭山湖を源とする東川がある。石垣を積んだ掘割のような、小さな川である。

昔は生活排水が流れ込み汚れた川であったが、今は大きな鯉が泳ぎ、時には白鷺もやってくる。東京オリオンピククの時に植えた桜並木は、所沢の名所でもある。

最近この川で翡翠を見る様になった。時に高価なカメラを持ったシニアが橋の上に佇んで居たりする。翡翠がこの東川で巣を作り、何時でも美しい姿を見られる日の来るのを想像するのは楽しい。



竹内弘子

咳込んで何か言はんとせし母よ

蒸留水ちゅと迸りインフルエンザ

回向めくあしたゆうべの落葉焚

久女忌や風邪の手足のたよりなき

暖房や赤い表紙のツルゲネフ

内戦の地の幼らよ早星

新蕎麦やあかい湯桶ゆとうの折鶴めく



深 深 と 田 中 藤 穂

木枯や中野坂上駅を出て

空がきれいと独りごちをり冬帽子

昔美女長命かこつおでん鍋

青空の深さどんぐり落ちる音

久々の深川飯も師走かな

深々とお辞儀をしたるマスクかな

臘月や子と向き合へる中華店

遺 伝

山梨の叔母の話では、私の父の父は徳川から明治の世に変わる時、村の中で一番最後まで丁髷を切らなかつた人だそうだ。流行や時勢にすぐついてゆけない私の性格も遺伝なのかも知れない。

私の友達のSさんのお祖父さんは桜田門外の変の時、さる藩の若侍で、何か起きたらしいというので、今の赤坂プリンスホテル辺りにあつた藩邸から駆け出して見に行つたと。Sさんは私の同年の友の中で一番元気で、スカイツリーが完成すればすぐ行くし、美術展や催物などにもせつせと足を運んでいる。やはり先祖の血を受け継いでいる様だ。私の子供達には親の悪い所は継がないでくれる様に、切に祈っています。

冬の虹 長崎桂子

嬰兒の背丈ほどなる大根かな

大根の並べるひとつ抱き抱へ

十二月朝は痛いとはいて

小春日の北の雨戸も開けにけり

初雪や揚げアンパンの粉砂糖

児ははしやぎ母の手を引く冬の虹

安らかな今日であるらし冬の虹

十二月急に寒の入りの様な冷え、故にあちらこちらの予定の行事は驚いて大童の大変な数日間、冬の風の後、屋外の様子は一変した。  
続いての木



早崎泰江

ふかぶかと変身願望冬帽子

冬満月従へるかに星一つ

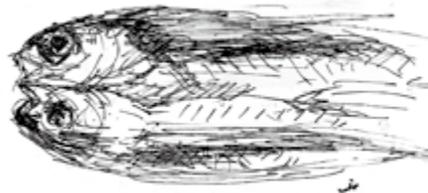
傷癒えて鴝の高音のしみとほる

わくわくすシンビジウムの花芽かな

枯木立深き真青な空にあり

木枯や眠れぬ夜のラジ才便

友よりの賀状代りの長電話



『みづおと』

堀内 一郎

(一九七三年)より

公園孤島驟雨愉しき杉楓

雨にもめげず恋人きちがひ茄子の花

病む馬の目から離れぬ誘蛾灯

炭住廃墟夏蝶の影大写し

ののしりて枇杷の皮剥ぐ丹念に

父の日は着る繭くさき紺緋

病院は塔の白さで梅雨はじまる



野 鳥 森 理 和

早口のお喋りつづく冬の鳥

尉鷓野鳥図鑑のもどかしく

石叩折しも鷓庭の池

街路樹のこの一本に冬雀

数へ日のラップ流るる美容室

大晦日高倉健の映画に酔ひ

大晦日人形町の列に居り

外国に住む知人からクリスマスプレゼントが届きました。ガムテープでしっかりと梱包されていたから、かなりもどかしい気持ちで開きました。ピンク色のセーター、鱧皮風の黒色のビニールのエコバッグ、手編みの毛糸の襟巻、そして大きな缶入りチョコ。あれあれ：二才女兒用の紫色のドレス、綿ニットのピンク色のワンピース・タイツ・パジャマ……。二才の孫を抱いた写真を八月頃に送りました。私の方がから戴いた「シャツを着た写真でした。孫は私の写真のアクセサリーで主役ではありませんでしたから、紹介もしませんでした。女の子に間違えられるとは予想もしませんでした。お礼の手紙にその旨を書き、女の子の品々は一才四ヶ月の紗希ちゃんに差し上げて、お母さんが「まあ！パーティードレスだわー」と喜んでいただいたことも書き添えました。十二月二十六日一件落着です。



吉弘恭子

冬空をあふれてきたる雨きれい

秋の日を耳の奥までしまひ込む

破蓮見ごろの水に己が影

町の灯のかがやきに似し冬に入る

風にのる冬の落葉のみじかき日

売大根曲線と直線と

笑みこぼす冬芽おおきく息すつて

二三日前大事なものをいれておく  
引き出しを用があって開けた。一番  
奥に桐箱に入ったものと封筒に入っ  
たものが重ねてあった。桐箱のもの  
は近所の産院で長女を産んだ時の病  
院の名前が、封筒のものは私の字で  
書かれた長男の名前があった。桐箱  
の中には初めての抜歯の歯と日付  
が、封筒の方は中にもう一枚茶封筒  
が有りへその緒と書いてあった。こ  
れにも抜歯の日付がありもう一枚袋  
にはいつていた。息子は、国立医療  
センターで生まれた。もうそろそろ  
二人に渡そうと思った。それにし  
て、桐箱と茶封筒とは！

壹歳半の滋子を軽視す冬の猫

喜孝

大福のごとし行水をへたる子

々

年用意 赤座典子

賀状書くラジオの第九遠く近く

落花生の殻剥いてをり雪催

店先の葱の芯まで冷えてをり

年用意友の作りし軸とする

室咲の木瓜の蒼の落易く

黙々と己が分担小晦日

篝火の灰払ひつつ札収

俳句に関する資料は、図書館を利用して読むことはあっても、自分で買うことは殆んどなかった。

「あを」への同時期に参加した鎌倉喜久恵さんが、昨年急逝され俳句関連の沢山の本を頂くことになった。歳時記・句集だけでなく、辞典類・花や野草に関するものまで、実に広範囲である。ホトトギスの歳時記は、表紙が剥れ最後のページは取れかかっていた。ちつとも素振りを見せなかったが、努力家であった。

この一年間に、私の読み終えたのは「鑑賞女性俳句の世界」第六巻「華やかな群像」という立派な一冊と「覚えておきたい極めつけの名作一〇〇〇」というコンパクトな一冊だけである。何とも不勉強で、喜久恵さんに申し訳ない次第である。



井上石動

腸食らふ犬の唸るや狩の宿

渡り鴨仕留めたる夜の咄かな

あかあかとお台場は不夜啼く千鳥

膝ぐりの二坪呑屋鱈大根

搔卷の別珍やさし生家かな

幸ちゃんのぬないこの町帰り花

狐火の出づや鋳つあん出張りませ

仲間に入れてもらいました。

本名・成美。男。初期高齢者。

山梨県大月在。産は甲府。

十年前、市募集の俳句教室への参加が、俳句との縁。

最晩年の藤田湘子『鷹』のペエへ  
工会員たりしが、湘子を亡くし以後、結社には属さず。

奇縁にて佐藤代表を知り、『あを』  
を読み、「この集まりの一員になれたら」と。

江戸俳諧の、諸俳人のあれこれを知るのが楽しくてならぬここ幾年。

一生懸命に、たのしく、のんびり  
ギスギス、まじめに、作句したい。

東京は遠いけれど、  
仲良くしてくださいね。

冬 銀 河

大日向幸江

五十円葉書に筆字鶴来たり

愛しさにふれてみるなり枇杷の花

けやき黄葉空の青さを忘れぬし

小春日の足指じゃんけんグーチヨキパー

豎琴のやうなる翼大白鳥

冬銀河おしゃべり楽しむウォーキング

日本の臍はフクシマ深雪晴

朝のラジオ体操の仲間達が夜八時に集まり一時間のナイトウォークをはじめた。

私は夜が苦手なので参加をためらっていた。風もなく空気も暖かな十二月一日ナイトウォークについて参加した。歩く速度が早く私はマイペースで歩く。見上げた夜空には、三つ並んだ星。西の方にはオレンジ色の一等星、嬉しくなり一人で空を見上げては星の唄を大きな声で唄いつづけた。

私の三月生れの星は牡羊座、空の真中の黄道の少し南東に出ている。

十二月の夜空を見上げるなんて子供の頃から思いもよらなかつた。

ゴール地点ではもう誰も残っていない。公園のけやきの木立に星がひとつ、もうお正月も近い。どこからか影が近寄って来た。

一人でウォーキング。

中 冬 木村茂登子

水仙の向きさまさまに香りをり

石路の黄の厚き緑につつまれて

白鳥の群舞の静止シクラメン

大いてふその裸木の逞しく

枯葉踏む枯葉が放つ陽の匂ひ

肅然と思ふことあり冬銀河

年用意陽のあるうちに外回り

年の瀬の慌しさの中で選挙戦が終り新内閣がスタートした。

新議員たちの晴れがましい初登庁の姿に、「初心忘るべからず」のことはを思い出した。

もう二十年程前のこと、知人が市議会議員に立候補し、共通の知人達が連日応援運動をしていたので、私も選挙運動最終日の午後六時から八時まで選挙カーに乗ってささやかな協力をした。しかし連呼しながら車を見ている人々に手を振り会釈することが如何に重労働か、たった二時間で痛感させられた。

十日余りの選挙運動期間の疲労は想像に余りある。

その上の当選の重さを忘れずにしつかり公約を果すべく国の為民の為公僕としてつくしてもらいたい。

夫入院

齊藤裕子

寝返りす横に夫なし除夜の鐘

病室の夫にも響け除夜の鐘

点滴の夫に寄り添ひ書く賀状

夫見舞ふ元日の空どんと晴れ

気丈夫を夫に見せんと初鏡

ままちやりでこの坂越えん今日の春

退院の夫と眺める松飾

12月26日、夫が胃カメラの検査で潰瘍が見つかり、五箇所細胞を採取した。その夜、夕食後に胃が圧されるように痛いと感じました。どうやっても治まらず、北里病院の救急外来で受診、超音波検査で胆石と判明、緊急入院。レントゲンとCT検査も受け入院手続を終えた時には、日も改まり27日の2時過ぎ。点滴のみで3日間禁食。お正月どころではなくなりました。幸い処置が早く痛みも治り大事には至らなかった。

一方潰瘍の方は、念の為怪しい所を再度胃カメラで検査することになり、私もそれなりの覚悟で正月を過ぎました。1月4日の検査で、ほぼ大丈夫との事。胆石は2月15日に手術予定。九日間の入院で無事退院した。大変な年明けとなった。

十二月 篠田純子

紅葉狩都バス一日乗車券

肩関節外れて嵌る烏瓜

小六月猫撫で声で猫を釣る

冬の陽や東京タワー銀色に

冬ぬくしピアノに合はせチューニング

年の暮スマートフォンに突き当たる

大騒ぎしてマロニエの葉の散れり

敬老館の移転に伴い皆でパブリックコメントを提出したり、署名活動をした。そのリーダー格の方に招待券があるからと宝塚歌劇に誘われた。

何年ぶりかの宝塚。オーケストラボックスでチューニングが始ると、わくわくしてきた。先ず、テレビドラマにもなった作品をコンパクトにまとめた舞台。次は唄と躍りのショー。肩を組み「ヤアー」という掛声に一斉に方向を変えるラインダンスは、見えていて元気が出る。モデルさんのような細い足でなく、体操の選手並のしっかりした足で、すばらしい筋肉が躍動している。フィナーレは豪華に羽根を背負い、全員での挨拶。

夢のような時は瞬く間に終わった。



芝宮須磨子

異国の唄勝手に訳し冬の窓

麻姑の手を片手に託す着膨れて

気遣ひのぬくもりこもる冬至粥

いちやう黄葉白塚の池覆ひけり



前月抄

雪近し茂邊地の驛は一軒家  
佐藤喜孝

冬立てり南無喝羅恒那多羅夜耶  
篠田純子

消し忘れたるかにひとつ冬烏賊火  
定梶しよう

風止んで庭一面の杉落葉  
須賀敏子

二歩三歩すさりて転ぶ冬畳  
田中藤穂

一茶忌や鋤き起す田に群れ雀  
長崎桂子

誰からも音沙汰のなし鱒雲  
早崎泰江

東京時雨のこる櫂をしたたらす  
堀内一郎



冬黄葉薬缶ちりちりカフェ静か

森 理和

電球はLEDや老の冬

吉成美代子

青空にとけてゆくなり冬の蝶

吉弘恭子

皇帝ダリアひらひらと咲き左見右見

赤座典子

闘志無き閑取を見てふぐを煮る

大日向幸江

新参の野良猫がゐる十二月

木村茂登子

冬晴や棟梁が使ふ草箒

斉藤裕子

喜孝抄



## 一月作品より

佐藤喜孝

冬立てり南無喝羅羅怛那多羅夜耶

篠田純子

「南無喝羅羅怛那多羅夜耶」は、なむからたんのーとらやーやーと読むらしい。大悲心陀羅尼經の  
出出し、日本の禪宗で広く誦誦される基本的な  
經典である、とある。意味は分らないが、何や  
らありがたさうで、重厚な響きがする。この響  
きと「冬立てり」の言葉が二本確りと立ってゐる。  
この句は意味を拒否してゐて俳句らしい俳句で  
ある。

消し忘れたるかにひとつ冬烏賊火

定梶じょう

昨年末、函館に泊した。もつたいないので一  
晩中ホテルの窓から津軽海峡の漁火を見てゐた。  
「烏賊火」は夏の季語、漁火は季語ではない。掲

句の冬の烏賊火は最盛期と違ひ数が少ないのか  
もしれない。ただ冬の夜の海に烏賊火が灯って  
ゐる。「消し忘れたるかに」のをかしみに寂寥を  
誘はれる。

早ばやと忘年会の話かな

田中藤穂

何とも素っ気ない句作り、のやうに見えて投  
げするやうな「かな」に妙味がある。殊更言  
挙げするほどの内容ではないとおもふのだがこ  
の「かな」に魅了された。

二歩三歩ささりて転ぶ冬畳

田中藤穂

スローモーションの映像を見るやうである。  
平衡感覚を失って二歩、三歩とさがる。体勢を  
立直さうと思ふ間もなく畳の上に転んで了った。

加齢の悲哀が冬畳の「冬」に滲み出てくる。

近々と見え冬晴のスカイツリー

田中藤穂

スカイツリーはいつの間にか東京人の自慢のひとつになったのかとこの句を読んで思った。この句もさうだが、作者の近業は言葉に無理をさせず、俳句の器にそつと盛りつける技を会得したやうに。体が俳句になってしまったのだからか。

一茶忌や鋤き起す田に群れ雀

長崎桂子

一茶忌は陰曆十一月十九日。昨年十二月三十一日であった。

福わらや雀が踊る鳶がまふ

門の春雀が先へ御慶哉

春めくや京も雀の鳴辺り

苔清水さあ鳩も来よ雀来よ

我と来て遊ぶや親のない雀

と一茶作品をあげだしたら切りがないほどある。作者にも

春雪の轍ついでむ雀かな

隣人の急に引越す寒雀

など雀に親しんだ句がある。

一茶は春めく京にて鶯よりも雀が適ふとおもふほど、雀に親しい。そのことを知る作者も、同じく雀を好しくおもつてゐるのだらう。鋤き起された田で餌を探してゐる群雀。佇んで眺めてゐるうちふと、一茶のことが浮んできたのだ。

東京時雨のこる櫛をしたたらす

堀内一郎

今作句がおもふやうにできぬ健康状態に作者はある。作句意欲を取り戻すすがに少し古い句だが一郎作品が「あを」に有つて欲しいのでお許し願ひたい。「みずおと」は私が俳句をはじめたところ。堀内一郎さんは大先輩として同誌

にをられた。私はここで俳句とお酒の楽しさを  
覚えた。東京時雨は『暖流』の鈴木石夫の句集  
名でもある。作者はこのことは勿論ご承知。挨拶  
の謂ひもあるはず。初冬の都会の抒情詩であ  
る。

### 瑠璃色の湯吞が二つ秋の暮

吉成美代子

湯吞が二つ食卓の上に影を置いてゐる。お氣  
に入りの瑠璃色の湯吞である。一つは私のもの、  
もうひとつは。言はずもがなである。静かな秋  
の暮である。舞台装置だけではあるが、生活が、  
人生の一部が垣間見える。先行句に

湯吞ふたつ眼鏡のふたつ置炬燵 芝宮須摩子

がある。「ふたつ」にかけた思ひは両句とも重い。

### 電球はLEDや老の冬

吉成美代子

冬は老人には特に厳しい季節。電球の暖かい  
色もいつも間にやら蛍光灯の冷たい色に、そし

て今は訳の分らぬLED照明に変わってゆく。L  
ED電球と老の冬の関係は作者が繋げた詩的必  
然である。見事である。

### 青空にとけてゆくなり冬の蝶

吉弘恭子

冬の暖かい日、蝶がどこからか出て来て飛ん  
であるのを見かけることがある。ふはふはと力  
なく低く飛ぶのが冬の蝶の印象。しかし掲句の  
蝶は思ひがけず高みへと飛びはじめた。眩しさ  
ゆゑか蝶を見失ふ。＼とけてゆくなり＼はこのや  
うな状況を詩的に捉へた。

### 皇帝ダリアひらひらと咲き左見右見 赤座典子

一度見てみたいと願つてゐる皇帝ダリア。ネッ  
トで見るとその丈の高いこと。三階の窓で花が  
見えるといふから驚き。掲句でもその様子が伝  
はつて来る。高すぎて不安定なのだろう。左見  
右見がその様子を伝えてくれる。「左見右見」の

擬人法も嫌みなく上手く使はれてゐる。

### 新参の野良猫がある十二月

木村茂登子

野良猫を常日頃気に掛けてゐる作者がある。このせわしない年末に見かけない野良猫を見た。今頃だうして野良になったのだらうかと案じる。「新参」がこの間の消息を見事に伝える働きをしてゐる。

### 冬晴や棟梁が使ふ草箒

斉藤裕子

草箒を使って建築現場を清掃してゐる。それもトップの棟梁がである。きつとガーガー音のする工具は最小限に使はれるのかもしれない。草箒が棟梁の性格を象徴してゐる。またそれを詠む作者も細かい心使をなされる方であらう。冬晴は作者の心もちのやうだ。

通巻 200号記念 月刊 **俳句界** 2013年 3月号

**平成名句大鑑**  
—現代俳句を代表する俳人、  
五百名の自選十句—

別冊付録 永久保存版  
蛇笏賞作家、各協会賞受賞作家など著名俳人をはじめ日本全国の實力俳人、平成俳壇を彩る五千句を一挙掲載！  
一人二ページ掲載でゆつたりと見やすいレイアウト、かつてない規模、約五百ページの平成秀句一覽

（カテゴリー）  
主宰推薦！ **結社期待の若手俳人 50**  
20代～40代までの結社推薦による若手俳人総勢50人を一挙クハラビア掲載！  
今後の俳壇期待若手俳人の代表句競詠

◆充実の連載陣

- 恋衣203／句・嵐まどか絵・わたせせいぞう
- 書斎訪問／塩川雄三
- 巻頭句のゆくえ／岸本尚毅
- ふたりの母（最終回）／山本安見子
- 俳句、その地平／大牧広
- 華瀧亭日常／矢島康吉
- 受験巡礼／今井聖
- 句鑑賞／酒井佐忠・石井いさお・川越歌澄

佐高信の甘口で「ニンニクハ！」  
**額額あや**（映画監督）

※一部変更の可能性あります。

株式会社 **文學の森** | 東京都新宿区島田馬場2-1-2 島ビル8F  
お求めは・・・〒169-0075 東京都新宿区島田馬場2-1-2 島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>



# 八田木枯回想

その七

—夕焼けて西の十萬億土透く 誓子

阿部寒林

(承前)

まさかと思ったことは当時、木枯も深夜営業の店を持ったことである。場所は六本木、教えられた通りに行く。当時ピンクのアマンドの横道、〃いもころがし坂〃の板が立っていた。最近のテレビを見ていたところこの坂を「芋洗ひ坂」と看板が立っていた、(どちらでもいいが)それ程広くないなら坂である。昭和四十年頃の景で言えば、やがて右に丸源の赤ネオンのビルに着く。このビルの何階だったかはわすれ

だが、『青髻』という店であった。女性は置かず来客が勝手に来て飲食し夜を愉しめばよいという主旨の店であった。店名も随分変わった名である。聞きもしなかつたが恐らく木枯の発案であろう。「青髻」といえばペローの六人の妻殺しの童話であるがこんな内容とは無関係のようである。この夜の木枯は初めてみる和服できりりと角帯を締めた姿は印象的であつた。経営の依頼をギター弾きのO青年にたくしているとのこと。兎角昭和三十年代から四十年代は現在の景気感覚以上に高度成長期にはいつたのである。木枯と俳句は当分無縁となつていたかもしれない。昭和四十年代の『天狼』を見ると遠星集の入選者数は創刊時の何倍かに増え頒価も百四十円である。恐らく木枯は三十六年に投句してから再び投ずることはなかつた。歌の世界ではフランク永井の『東京午前三時』などが現れ又『東京ナイトクラブ』或は大ヒットの『有楽町で逢いましょう』など世相をよく反映している歌が流れた時代である。一節の演歌に誰も覚えありである。

深夜経営のスナックのOは久居の妻子の知るところとなり遂に伊勢に引き揚げたとのこと、木枯の言であつた。自分の『青髻』は順調のようであつたが、水商売は売掛を作らねば売上が伸びない性質を持っている。のでその回収により成績が左右されると言つていた。お義理で銀座―赤坂の帰りに『青髻』へ同業仲間と寄つたりしたがほとんど木枯と会えなかつた。四谷の自宅には幼いふたりの娘と難病の妻の存在。好

景気の影で木枯の苦痛が想像できた。彼は夜遊びの名人で決して溺れることはなかった。

### 木枯俳句確立へ

六本木の「青髯」を経営一任させていた〇に譲度したと木枯の話であった。その間の事情は訊く必要もなかった。しかし経済的にも困難な時代に入ったことは確かである。材木問屋の若大将、あるいは各上場商社の木材部の社員、製紙会社、他地方の大問屋など商売上の夜の交際（つきあい）の中で醜悪な虚栄の世界を味合う体験をしたということになる。また一步誤れば私生活に影響するかもしれないと思った。すべてその行動は当時の景気が左右することは当然である。

昭和五十二年に入って、木枯から『晩紅』第一号が送られてきた。四十八年から五十年にかけて長谷川萬治が三年連続長者番付全国一位になった年である。

「やっと句を出せる広場を見つけました、旧作もすこし混ぜて発表しましたので、御朱筆下さるように、八田日刈」

丁寧な文字でこのメモが今も誌中にはさまれてある。『晩紅』はうさみとしをと二人だけの同人誌で冒頭木枯が「あらくれし日月の鈔」と題し三十四句を発表している。

としをは “鑑賞茫茫” と題し誓子俳句を採り上げているが骨のある文章で読み応えがある。『晩紅』はたった二十五頁の薄っぺらな誌であるが内容的には評価されてよい。『晩紅』第一号の木枯作品を少し記す。

まつしぐら少年虹と心中せり  
ふるさとの根のはびこりし花の雲  
野遊びにことよせてゆく柩かな  
葬列のよじれて曲る蝶の昼  
死後のものか午後の干網白く透き  
鳥死して翅を野分が動かせり

いま、橋本多佳子の文をなつかしむに――  
多佳子恋ふその頃われも罌粟まみれ  
あらくれて日月は逝く鴛鴦のそば

続



八田木枯の句集

汗馬楽鈔

於母影帖

あらくれし日月の鈔

天袋

夜さり

鏡騷

八田木枯少年期句集

昭和六三年

平成 七年

平成 七年

平成 十年

平成十六年

平成三二年

平成二四年





# 能登だより (1)

定樞じょう



住まっている回りの四季の移りかわりを地元の  
俳人の句を通じて紹介しろ、と喜孝さんの仰せな  
のですが、これが難しい。と申しますのも、圧倒  
的にホトトギス系列の人が多くて、従って私とは  
句風が氷炭相容れない。△二千年古稀健やかに初  
詣▽のような句が合同句集にずらりと並ぶ。この  
句、初句会に高点句として遇されたそうで、句会  
参加者のひとりにその意味を問うたら、よく分ら  
ないがめでたそうだから入点した、と言う。そし  
て「初句会」も必ず「初の句座」と言わなければ  
ならない。△今在りしことの仕合せ初の句座▽。私  
の怠慢不遜からの言、ととられそうですが話を進  
めます。

かれら彼女たちはともかく措辞が紋切型。秘境・

能登・日本海・地の涯て・能登荒磯・能登に住む・  
農に生く等々、こんな言葉遣った句が合同句集に  
蜿とつづくのです。〈秘境の能登の涯てに住む〉と  
書いて季語をくつつければ一句になるというわけで  
しよう。狭い半島ですから人の足跡の入らぬ処なん  
てどんな山奥に行ってもありません。

私、今「山奥」といいましたが、能登半島の日本  
海側（私達は外浦といってます）から少し奥に入れ  
ば、そこが高地ならず富山湾側（私達は内浦とい  
う）が見えてくる。そんな能登に秘境もないもんだ、  
と思うのですが、合同句集にはやっぱりそんな句が  
並ぶのです。〈能登秘境雪割草に彩られ〉〈波の花舞  
ひて秘境の海暗し〉〈雪割草咲かす岬も秘境なる〉  
〈洲浜草咲きて秘境の岬訪ふ〉。どんどん並ぶのです。  
それでも有難いことに俳句はたった十七文字、偶然  
とはいませんが佳句のできることも大いにあるの  
です。で、句会で点をもろうともう止められない。  
私がそうでしたから自信をもって言えるのです。そ

して下手さを私がそしるのにはある条件理由がある  
のです。

句歴二〇年を境に駄句凡句の数が減っていくよう  
なのです。私の従姉妹なのですが、〈平穏な暮しを  
謝して初詣〉のような平凡な句を作る一方、

梅雨の空柱状節理くづれさう 安本 峰子

こんな句も発表するのです。まさに彼女は句歴  
二十数年を閲している。で、先にあげた凡句例の方々  
はみな五年から十年の句歴。そしてそれらの句会で  
は講評という一切しませんから、いつ迄たっ  
ても上達しない。

二〇年という時間を閲しなければ上達しない原因  
がそこにある、実に気の毒な状態なのですが、誰も  
講評なんて経験していませんので、選をして披講し  
て点が入ったか、だけが興味の焦点。しかしさすが  
に四〇年五〇年の経験を積んでいる方々は違いま  
す。以下にホトトギス系でもそんな方々の句を紹介

したい。私の身うちの者の句もありますので面映ゆいことですが勘弁を頂いて。

扱て、私の住まう処は圧倒的に外国航路の船員の多いところ。平成に入る前には四〇〇名近く人員がいたそうです。その方々の送金で役場の税収も相当潤ったらしい。

春燈や船に畳の娯楽室

柴田 道人

全速の舳に波裂けて夜行蟲

〃

交信の電波乱るる時雨かな

〃

航きかかるスエズ運河や油照り

吉田 呑洋

年賀電地球の裏の祖国より

〃

そして次の句は、十ヶ月（現在と違い以前は十ヶ月乗船して二、三ヶ月の休暇が普通でした）の洋上勤務が明けて帰国の主人を迎える奥様の句、

肌寒や夫待つ駅の大時計

向 さち子

あるいは夫のみか、子息をも外国航路勤務に出した母の句

子の航路印度洋てふ月仰ぐ

南 まさ子

阿倍仲麻呂の世から人は変っていないのです。以下、近年亡くなった方もとりまぜてホトトギス系の人の句。

惜春の杖ゆるゆると歩くべし

松原 鶴声

牛飼うて一戸一村百千鳥

伊藤 小華

啓蟄の畦踏みはづし踏みはづし

定梶 たつ子

ふる時計でたらめ打って西日中

池腰 伊豆子

ヘルメットかぶせて案山子生きてくる

中西ヨシ子

海苔岩へ渡る梯子を四つん這ひ

定梶 き悦

風垣につけ足してある海女の稲架

〃

懸大根残し燈台守替る

〃

今は無人になりましたが、以前は燈台守が常駐し

ていました。拙句に「燈台官舎一畝つくる春大根」があるのを思い出しました。もともと保守色のつよい能登です。ホトトギス系の俳人が沢山いたことも当然のことでしたらう。今はやや事情が違ってきています。私が『あを』に所属した如く、句誌の大小に拘らなくなってきた。そんな方々の中から

流れ若布やこれを流人の食べしなり 定梶 草平

竹の骨髄の筋肉案山子立つ

嫁いぢめして巢の燕いとほしむ

角川「俳句賞」をとられた市堀玉宗さんの

ふところに仔猫鳴かせて捨てにゆく

数年前句集を上梓された中本富女さんも句歴が長い

犬ふぐり星の涙か地に落ちて

そして私の同士である中川句寿夫さん

ふところの露のたう白の上におく

朴の芽がほぐるる童話読むやうに

秋冷の群を離れて真鯉かな

遠縁に当る男の頬被

初蝶やものみな揺れてゐる日なり

最後の句は、『雲母』全国大会で飯田龍太が特選にとった句。

俳句は経験の文芸だとは、昔からいわれています。意味が二つあって、年齢をつまなくてはいい句がつかれない、の意と、作句経験をつまなくてはいい句がつかれない、という意味。詠むは読むこと、読むは詠むこと。沢山つくって沢山読んで経験を積む。

結局、俳句は実年齢にこだわる文芸ではない、ということだと。

# 獐回頭

高島茂 選評

エジプトの女王のごとく朝寝せる

竹内 弘子

朝寝は「春眠暁を覚えず」と春の季語。クレオパトラに変身した作者がいかにも  
気持ちよさそうに朝寝しているのが良い。エジプトとの女王とはよく謂えた。

(一九九一年五月)

大石を揺り動かして池普請

伊万里梅城

暫くは水干しあがり池普請

社寺や庭園には池がある。梅城さんの居られる虚不動庵の池であろうか。冬になつて水が涸れた時期をみて、穢れを取替えたり、水底の芥をとりのぞいたりする。川普請もまた同じである。大石を動かしたりするのは一人では出来ない。男衆を幾人も頼んで整備する。傍では焚火をして煖をとりながら行う。池の鯉や鮒がぴしぴし暴れるのも眼に見えるようである。ちなみに『ホトトギス雑詠選集』冬の部をみたら、一句だけ例句があった。

池普請土手に並びし子供かな

松藤夏山

(昭和九年)

梅城さんのこの二句とも出色の作である。池普請などという季語は、これからの俳句には見られなくなると思うと淋しい気もする。

(一九九二年四月)

### ゆく春やたびたび数珠を袖圍ひ

堀内 一郎

和服か袈裟の袖で手にした数珠をときどき覆うのである。お葬式のときの作だとおもう。お坊さんでもよいが、これは作者に違いない。この句は五月の句会で採った。その時冗談に、歌舞伎の狂言で河内山宗俊の、とんだ処へ北村大膳という場面の宗俊の仕草のようだといって笑った。仏事であるから、作者の「たびたび数珠を袖圍ひ」には故人への思いが籠っている。「ゆく春」の季語もよい。

### あたらしき母の来たりし麥の秋

堀内 一郎

「麥妥の秋戦鬪帽は冠りけり」の作とあわせて、戦中戦後のことを思った。田舎に疎開した少年の、過ぎ去った日々が再現されているようである。あたらしい母が来るということは、少年にとって、期待と不安で情はゆれうごく。モノクロの映画を観ているようにゆっくりと語りかけてくる。

(一九九一年六月)

# 俳画展

長崎桂子

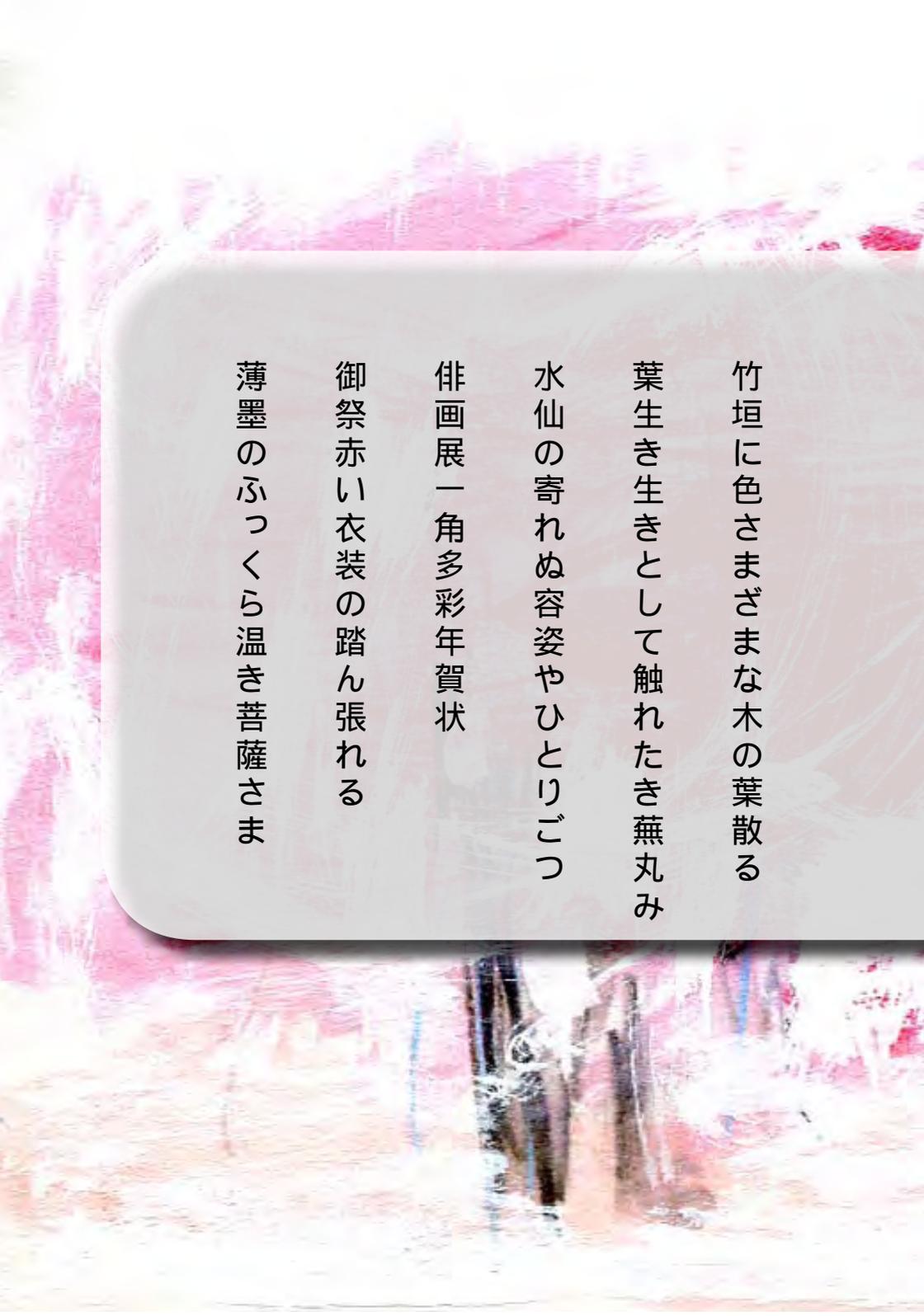
菊冷や秋明菊すくと俳画展

会場の隅隅飾る烏瓜

コスモスや風に靡いてしなやかに

野の菊は色明かに愛らしき

山里の住みの美男葛かな



竹垣に色さまざまな木の葉散る

葉生き生きとして触れたき蕪丸み

水仙の寄れぬ容姿やひとりごつ

伴画展一角多彩年賀状

御祭赤い衣装の踏ん張れる

薄墨のふっくら温き菩薩さま

あとがき

「仰せ」を調べてみた。目上の人の言いつけ。御命令とある。今月より「能登だより」を定規様に書いていただけることになった。題は私が相談もなしに付けさせていただいた。気の利いた題ではないが、話題がだう飛んでも大丈夫ではと考へた。文中冒頭「仰せ」とあり読む目が止った。じょうさんの方が目上なのだから筆者一流の諧謔と受け止めることとした。

江戸の俳人で私が全句集を持つてゐるのは芭蕉・蕪村・成美ぐらいか。成美の姓は夏目。「熱き日や百日紅のちりもせで」「寒月や岩にさはらば欠けぬべく」などがある。「大蟻のたたみをありく暑さ哉」「足軽のかたまつて行く寒さかな」と鋭敏な感性の井上士朗。この二人の名前を合体したのが新会員の井上成美氏。俳号でこれ以上はないともおもへるが俳号は石動、地名から取られたやうだ。井上成美さんは獐の伊万里梅城老師のご縁である。長崎桂子さんも獐のご縁。高島茂さんもどこかで喜んで下さつてゐるとおもつてゐる。

る。

「二郎わすれぐさ」今月ページの都合により休載させていただきます。

### 新入会員ご紹介

井上 石動<sup>せきどう</sup> 様

山梨県大月市賑岡町強瀬一八四八 石動団地

### ご厚志多謝

木村茂登子 様

二〇一三年二月号

発行日	二月十日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・6908・6038

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子・堀内一郎

表紙・佐藤喜孝

竹僊房

郵便振替

00130・6・55526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。

